

「すべて知っ^ていながら」

ダニエル 5 : 18 - 31

March.8.2020

ダニエル 5 : 18 - 31 (パワポ)

Preface

先週のお話の復習からしたいと思います。

バビロンの都は、バビロン帝国の最後の王ナボニドゥスを破り、攻め上ってきたメディア・ペルシア連合軍によって、その城塞を何重にも包囲されているような危機的状況にありました。

そんな危機的状況の中に置かれたバビロンの都の臨時責任者として、王のような権勢を振るっていたナボニドゥスの息子ベルシャツアルは、危機に備えるどころか、国中の貴族千人を集めて、男女入り乱れた飲めや歌えやの不毛な大酒宴を開いていました。

そして、まことの神を礼拝する時にのみ、祭司だけが取り扱うことの出来る神の宮の器で、酒を飲み交わすという、決してあってはならない神への冒瀆を働きました。

やせ我慢をしながら虚勢を張り、酒に酔い、金に酔い、乱行に酔い、権力に酔い、から元気に良い、意地と人を見下すことに酔い、罪なる行いをもって自分の弱さと貧しさを包み隠すことに酔い、結果的に神をも恐れぬ冒瀆な生き様をさらした、ちょうどその時、

人の手の形をした神の手が突然現れ、宮殿の塗り壁に、文字が書かれました。

その文字の登場が、パーティーの雰囲気を一気に凍らせました。

壁一面に描かれたバビロンの栄光の軌跡を否定するかのように、壁に上書きされたその文字がかもし出す、霊的威圧感^は尋常ではありませんでした。

神のご臨在、聖なる聖いパワーが、そこから溢れ出て仕方がないのです。

乱痴気騒ぎに酔っていたベルシャツアルも、貴族も、高位高官たちも、神を冒瀆した結果現れたものであることは感じましたが、それが何を意味するのかが分かりません。そして、恐怖に縛られました。

国中の知者たちをかき集めて、解説させようとはしますが、出来ません。

人の持つ知恵や英知の粋をもってしても解くことが出来ない、分からないということが、さらに恐怖を加速させました。

Part One

そこで、ついにダニエルが登場します。

ダニエルは、聖なる神の霊が宿る人であり、それゆえに才気と聡明さと、知恵に溢れた人でした。

一線から退いて、30年近く経った82歳のダニエルでありましたが、そのダニエルから満ち溢れる信仰的気迫、霊的気迫、そして静かだけれどもまことの神をまことに信じる人に与えられる恐れのないその目の輝きは、その場にいる国のV.I.P.たち1000人を含めた2000人以上の人たちを圧倒しました。

持っている杯をその場に置くしかなかったと思います。

獅子は腐った肉は食べないと言いますが、神を冒瀆し人を見下す腐った肉のような繁栄に身を委ねることを、断固として拒絶する、霊的獅子のような人、まことの神の人、神の霊の宿る人ダニエルのその存在感に、自分たちの姿が恥ずかしくなってしまうました。

自分たちの放蕩ぶりが、恥ずかしくてたまらないのです。

人は、神の霊の宿るまことの神の人を前にすると、自分の罪深さ加減を、なんだか見透かされているような気もしますし、羞恥心を覚えます。

でも、やっぱり、その恥じらいを素直に認めることが出来ないのが私たち人間です。

ベルシャツアルは、最後までダニエルと人々の前で虚勢を張り、もし文字を解釈出来れば、ダニエルに褒美を与えると、ダニエルに向けられた関心を今一度自分に向けさせようと、生半可な空威張りでその場を制圧しようとしてしました。

しかし、ダニエルは王の与える財にも、権力にも、見向きもしません。

ベルシャツアルの背中に、冷や汗が流れたことでしょう。

この人には、金も通じないし、権力も通じない。世は、金で動かさない人を恐れますし、権力の前にひざまずかない人を恐れます。

父や祖父を通して伝え聞いている、あの偉大なネブカドネツアル王が、唯一ひざまずいて褒めたたえた天の神は、今一度、ダニエルを通して、その存在を明らかにしました。

そして、王でさえも、制御することの出来ないダニエルのその聖なる存在感の前に、この王国の運命がかかっていると誰もが思えました。

その口から発せられる言葉に皆が注目せずには、いられません。

国を動かすのは、そこにいた王でもなく、貴族や高位高官官僚、為政者たちで

もなく、神に祈ることと神の言葉を人生とする神の人、ダニエルでした。

Part Two

そんなダニエルは、壁に書かれた文字を読み解いてあげるために現れたのに、いの一番に、その意味を告げることはしませんでした。

まずは、なぜ、神の指で文字書かれなければならなかったのか、その背景 context について話します。 context を解かないで、text を提示しても理解できないからです。

ダニエルは、こんなことに至った経緯について、先に、話します。その内容は、ネブカドネツアルの人生についてです。

ダニエル5：18 (パワポ)

(父上とは、祖父ネブカドネツアルのこと。あやかりたい。尊敬。風習。)

ベルシャツアルにダニエルは、「あなたがこんなに贅沢な暮らしが出来ているのは、あなたの家門のおかげ、あなたのおじいちゃんのおかげですよ。」と、言うわけですね。

しかも、ネブカドネツアル王の業績や功績も、ネブカドネツアルが成した結果得られたものではなく、いと高き神が、ネブカドネツアル王に与えたものに過ぎないと、丁寧に、言い放ちます。

ダニエルの言葉の主語は、ネブカドネツアルではなく、“いと高き神”です。

ダニエル書には、何度も“いと高き神”という単語が出てきますが、所詮人間の力の象徴に過ぎない王よりも、はるかに高き方がおられ、その至極高い方は、生ける唯一の天の神であられるんだという事を、ダニエルは何度も言及します。

続けて、ダニエルは、その神が、ネブカドネツアルに特別に許して下さった大きな栄華を、まともに用いることの出来なかったネブカドネツアル王の行いについて言及します。

ダニエル5：19 (パワポ)

ネブカドネツアルは、思いのままに人を殺し、思いのままに人を生かし、思いのままに人を高め、思いのままに人を低くしました。 こんな力ってあります？

正に、高慢を絵にかいたような生き様です。

すべて、思いのままに人生を生きました。

もし思いのままにならないと、怒り、力を振りかざし、蔑視し、見下し、さばき、恨みました。

謙遜な人は、まことの天の神に祈ってから動きます。

高慢な人は、自分のやりたいようにしますから、祈りません。 祈ったところで、自分本位なご利益成就の祈りしか祈りません。

ネブカドネツアルは、絶大な権力を神様が下さったのに、その権力の使い方を神様に尋ねることもなく、思いのままに振りかざすんですね。

神様が私たちに、人にはない何か力を与えてくださった時には、目的があるのですが、その目的は天の神様に祈らなければわかりません。

ネブカドネツアルはいと高き神に祈らないがために、その特別に与えられた力を自己自慢のために使ってしまいます。

ダニエル5：20-21 (パワポ)

ネブカドネツアル王は、与えられた力を、思いのままに使った結果、神の制裁が下り、その高慢が打たれました。

実のところ、ネブカドネツアル王の終生に渡って、神様の警告がありました。

その警告の実存が、ダニエルです。

神様は、ネブカドネツアルに、罪の制御装置として、ダニエルを与えたのです。

(私たちにもそういう人がいますよね)

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴが、燃える炉の中に投げ入れられながらも、生還した事件も、自分の栄華を示そうと金の像まで作ったネブカドネツアルに対する警告でした。

神様のイエローカードを無視したら、どうなりますか？

レッドカードが出て、退場です。

ネブカドネツアルは、その王位から引きずり降ろされ、人とは思えないほどに精神に異常をきたし、野っばらで獣のように、3年半這いずるように生きました。

栄光がすべてだという人から、栄光が取り上げられると、悲惨極まりありません。お金のすべてだという人から、お金が取り上げられると、全くの無力になります。

誇りが、プライドが、経験が、人脈が、知識が、キャリアがすべてだという人から、それらが取り上げられることが、人生には起こることがあります。

栄光がすべてであったネブカドネツアルは、その栄光を、神様から、しばし、取り上げられました。

“この栄光を取り上げた”というのが、とても重要なのですが、本来、栄光とは、ギリシャ語でドクサと訳され、神に使う言葉であり、神のみがお召しになることが出来るものです。

なのに、人が、その栄光を着ようとし、その栄光を着れば、自分が神のような存在になれると錯覚します。

どんなに奇麗で華やかな世界にたった一着しかない女性用の服を私が着ても、華やかにはなりません。目を覆いたくなる姿でしかありません。

私たちは、あの座に、あの席に着きさえすれば、成功を手に入れ、ハッピーだと思いますが、錯覚です。

ライオンキングの座に、子猫が座って、「にゃー」と言ったところで、格好よくなんかありません。

神のみが座すことの出来るところに、人間がよじ登って座ったところで、格好つきません。自分で自分を見ても見苦しいですし、人が見ても滑稽です。ましてや、神様をご覧になれば、その似つかわしくないことは一目瞭然ですし、そこから必ず、引きずり降ろされます。

創世記3章には、人が神のようになりたい欲求に駆られて、身の丈に合わない善悪の知識の木を食べ、結局、滅びと死に支配されてしまったことが記録されています。

また聖書には、神に反し、人を誘惑するサタンや悪魔も、神のようになりたかったという欲望ゆえに、天から落とされ墮天使となって、永遠の滅びに怯える者となったことを記しています。

箴言16：18（パワポ）

人は、どんなにたくさん得たところで、高慢と高ぶりに酔うならば、破滅と挫折が、必ず約束されています。神を信じようが、信じまいが関係ありません。高慢は破滅を呼び、高ぶりは挫折を招きます。逆に言えば、挫折は高ぶりの証拠であり、破滅は高慢の結果です。

人生にはいろんな挫折と破滅があると思いますが、ネブカドネツアルは、挫折して高ぶりを知り、破滅して高慢を知りました。でも、これは恵みでした。

なぜなら、高ぶりとは高慢を知って、絶対者であられる、いと高き神に出会ったからです。だから、高ぶりとは高慢を知ることは、恵みです。

ネブカドネツアルは、挫折と破滅を通して、いと高き神に出会いました。

そして、主権者であられるいと高き神が、人間の国を支配することを悟るんです。こんな恵みがあるでしょうか。人が支配するのではなく、神が支配するという事を知れると、人は自由になります。

自分が有能だから、稀代の覇者、伝説の王になれたと思っていましたが、違いました。

自分にそのような権力を与えられたのは、神のみこころにかなうこと、つまり、神から諸民族、諸国民、諸言語の者たちに仕えることを期待されていたのに、思いのままに人を殺し、生かし、高め、低めるといふ、自己満足、自己陶醉のために、その力を使ったために、取り上げられことを悟りました。

ネブカドネツアルが歴史の主人公ではなく、神の造られる歴史のいち出演者に他ならず、いと高き神こそ、歴史の主人公であることを悟ったのです。

Part Four

そして、ベルシャツアルです。彼は、このネブカドネツアルに起こったすべての出来事を知っていました。

ダニエル 5 : 22 - 23 (パワポ)

ベルシャツアルは、ネブカドネツアルに起こったすべてのことを知っていました。

それでも、人を見下し、神を冒瀆しました。

私たちの人生の戦いは、人生の中心に私を置くか、いと高き神を置くかの戦いです。

人は、いつも自分が主人公になることを望みながら、食べて、飲んで、ことを成します。

聖書はいいますね、食べるにも、飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光をあらわすためにしなさい、と。

第一コリント 10 : 31 (パワポ)

でも、ベルシャツアルの開いた大宴会の目的は、食べて飲むことを通して、神を無視し、冒瀆することでした。

そのため、結局その宴会が、彼らの滅亡を招く宴会となってしまうんですね。

ダニエル 5 : 24 - 28, 30 (パワポ)

「メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン」

「数えて、数えて、量ってみたら、目方が足りないから、粉々に砕いてしまう。」
という意味です。

つまり、「主なる神様が、バビロンの罪を数えて、一つ一つ全部検討した後に、
罪の重さを量ってみたら、これ以上、さばきを伸ばすことは出来ないくらいであ
り、それゆえに、バビロンを崩し、切れ切れにして、分割してしまう。」という
ことです。

神様は、私たちの生きた日々を数え（メネ）、その重みを計ります（テケル）。
時間は私たちのものではありません。 神のものですね。

なのに、私たち人間は、あたかも時間は、私たちのものだと思い違いをして、
私たち自身のためだけに用います。

そのため、その重みがありません。

時間は、私たちのために使った時に、重みが出るのではなく、神のために、神
を愛すために、人のために、人を愛すために使った時、重みが出るものです。

ベルシャツアルの人生とその重みは、神様が期待する重さに全くもって足り
ませんでした。また同時に、神様が期待しない重みは、過ぎるほどにありました。

義の重さ、謙遜の重さ、献身の重さは、全くもって足りず、罪や高慢の重さは、
あまりにも重かったのです。 どれほど、重かったかと言いますと、さばきを先
延ばしすることが出来ないほどに重かったのです。

長寿も神様が与えた祝福だと思います。 しかし、それ以上の祝福は、人生の
密度、重さです。

イエス様は、たった33歳という若さで亡くなりましたが、のろわれた人生で
すか？ それとも軽い人生でしたか？

違いますね。 どの人生よりも、重い、密度の濃い人生でした。

一日一日を、やり過ごすように生きたのではなく、父なる神の御旨をなすこと
を楽しみながら、前にあって、その歩みの貴重さを覚え、積み重ねて行かれました。

私たちの人生は、神の前にあって積み重ねられる時間です。

御父、御子、御霊の三位一体なる神と、どれだけ親密な関係を持ったのか。

どれだけ、神のみこころにかなうことを行ったのか。

どれだけ、神の国拡大のために生きたのか。

どれだけ、神に喜んでいただけたのか。

いと高き神様は、今も、私たちの人生の日々を数え、神の秤で量っておられま
す。

Part Five

そして、パルシン。

与えられた権力を、人々に、国々に仕えるために、用いるのではなかったために、その力は取り上げられ、分散され、他の人に、他の国に与えると言うのです。

与えられた力、頭、手足、お金、時間、教会に下さった恵みを、私たちが神を愛すために、使わないならば、腐ってしまいます。もしくは、その燭台は、他のところに移されてしまいます。

2週前に、“聞くドラマ聖書”のアプリを作られたムン・ボンジュ先生をお招きして、メッセージをしていただきましたが、ムン先生と食事をしながら、お話しする機会が与えられました。

その時、“聞くドラマ聖書”を発行している日本G (grace) & M (mercy) 文化財団の創設者のお話を伺いました。

もともとG&M文化財団は、元々アメリカの財団で、ビル・ファンという韓国系アメリカ人のクリスチャンによってつくられた財団なんだと聞きました。

で、このビル・ファンさんは、幼い頃、牧師の両親に連れられてアメリカに移住したのですが、移住してから2年後に、お父様を亡くされたんです。

途端に生活が大変になったのですが、牧師夫人だったお母様が、今度は、メキシコの宣教師として20年間働かれるんですね。

幼い頃、たくさんご苦労されたのですが、成人してから、株式投資をするトレーダーとして、大成功を治め、いわゆる億万長者になるんです。

でも、順風満帆だったビジネスで、大きな問題と危機に直面して、挫折を経験されました。

挫折と絶望の中、改めて、オーディオバイブルの聖書の言葉に耳を傾け、挫折した心に聖書の言葉が染みていく経験をして、聖書の言葉を聞くことによって、生き抜く力を得る文化事業と、社会から疎外されている人たちとともに生きる支援活動というビジョンのもとに、2006年にニューヨークで、日本円にして、500億円をかけてG&M財団を設立したそうです。

そして、一人でも多くの日本の方々に、聖書の言葉を聞くことによって、イエス様に出会い、日々どこか満ち足りない思いが癒され、励まされ、生きる力を与えられるようにという祈りを込めて、作ったのが無料のアプリ“聞くドラマ聖書”なんですね。

制作に2億円かかり、いちダウンロードにつき、新改訳聖書の著作権がありますから、決まった額を新改訳聖書発行元にお支払いしているそうです。

ビル・ファンさんのお話を伺って、神より与えられた富をもって挫折し、へりくだって恵みへと転換させて、神のために、人のために、用いようとする方が、確かに現代にもいるんだという爽快な気持ちになりました。

神より与えられし富を、力を、神の御旨にかなわない使い方をしたベルシャツアルは、結局、その宴の席で、何者かの手によって殺されてしまいました。バビロンの栄華は、あまりにもあっさり、幕を閉じてしまいました。

ヤコブの手紙4：14－15（パウポ）

神の御旨を尋ねずに、自分本位に生きるいのちは、霧のようなものだと言います。

ネブカドネツアルの高ぶりと、へりくだりをすべて知っていながら、心を低くせず、神を冒瀆し、人を見下し続けたベルシャツアルとバビロンに、

徐々にではなく、雷に突然打たれるかのように神の裁きが下り、霧のようにあっという間に消えてしまいました。

知っていながら、行わなかった者の末路です。

バビロンが、こんなにも簡単に、崩れ去るとは、誰も想像だに出来ませんでした。

誰も滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる神様ですから、もし、ダニエルの言葉を聞いて、即時、へりくだり、悔い改めたなら、こんな最期を迎えることはなかったかもしれません。

Conclusion

聖書は、世が終わることを約束していますが、その終わり方は、まるでバビロンの滅亡と類似していると言います。

ヨハネの黙示録18：1－3（パウポ）

（彼女とは、大バビロンのことです。）

バビロンの都は、難攻不落の城塞であり、巨大で、華やかで、繁栄の象徴のような存在でしたが、神の視点、霊的視点で見ると、悪霊の住処、汚れた霊の巣窟でしかありません。

人の手によってつくられた日本中の、そして世界中の都市、都市、都市。夜になれば、眠ることを知らない不夜城のように、煌々と照らされるネオンと灯り。

（ラスベガス、きらびやか、飽きる、欲望と空虚うずまく、虚像ユートピア）

欲と嫉妬と、切った張ったの暴虐と虚像に満ちた世界。

その正体は、悪霊の住処であり、汚れた霊の巣窟です。

人が織りなす世の乱行ぶりが積み重なれば、ある時、破裂します。
神の裁きは、誰も避けることは出来ません。なのに、私たち人は錯覚します。

ヨハネの黙示録18：7-8 (パワポ)

最後の瞬間まで、私たち人は、贅沢を求めます。

ベルシャツアルが、最後の瞬間まで悟ることが出来なかったように、今も世界は、大バロンは倒れるという、この大事な真実を悟ろうとはしません。

むしろ、目を背けます。

でもやっぱりこの世の中がいい。案外住み心地もいいし、このままずっとなんてこと思うかもしれませんが、その思いは幻想です。

何日もかけて作った映画の巨大セットが、撮影が始まったその瞬間、一気に爆破されて木っ端微塵になるようなところに、「なんてきれいなセット何だろう。ここに建っているあの美しいアパートメントの一室を買いましょう。」なんていう愚かなことは誰もしません。なぜなら、時が来れば、木っ端微塵に崩壊するからです。

でも、世の中、そう回っています。

だから、私たちは、この最後の時代、目を覚ましていなければなりません。

ダニエルは、数十年間、権力の魅惑に囲まれたバビロン帝国の公職に就きながら、どの権力の綱を掴んで、おもねながらついて行けば、権力の甘い汁を吸うことが出来るだろうかと、四六時中、画策する人々に囲まれて、過ごしていましたが、ダニエルは、どの綱も掴みませんでした。

もっぱら、ひとえに、ひたすらに、天におられる神様の勢いと力にのみ、すがりました。そして、たゆみなく祈りました。

そんなダニエルの前に、世は羞恥心を覚えるんです。

ダニエルは、世に対する、神様の最後のカードです。

私たちは、あのバビロンの大酒宴にいた客人でしょうか。

それとも、ダニエルでしょうか。

私たちは、日々、御言葉によって目を覚まし、神様の御旨が何なのか見分け、世は止めどもない歯車のように回っていたとしても、私たちは、ダニエルを通して神様が教えてくださる終末論的聖さをもって、生きて行かなければなりません。

福音に生き、福音のために生き、キリストにある群れを大いに喜びながら、ダニエルのように生きることを、いと高き神から、期待されています。

私たちと私たちの子どもたちが、世にあっても、世に染まらず、その目を見たら、世が恥ずかしさを覚えるようなダニエルとなることを、願ってやみません。

お祈りしましょう。

祝祷：第一コリント 10 : 31